戦後教育50年「実践記録」の提起を検討する

林友三郎『おとなは敵だった』の検討

馬居　政幸――静岡大学教育学部教授

一　一読して

一九五八年から一九六一年までの東京都足立区立第一中学校において、非行少年と格闘する教師たちの指導の過程を、その教師の一人である林友三郎氏が出版社（国土社）の求めに応じてまとめた実践記録が本書である。初版は六二年、七九年に再刊され、九〇年に『現代教育一〇一選』の一冊として再々刊されている。

実は私は本稿の依頼文を読むまで本書と林氏のことを全く知らなかった。研究対象外にある人と作品であったからである。だが、戦後五〇年の節目を契機に教育実践を問いなおす必要性は感じていた。そのため執筆依頼を好機と考え、手元に届いた本書（九〇年版以下引用は同書）を一気に読んだ直後に浮かんだのが次の言葉である。

「違和感六割、共感と発見が四割、基本的には過去の作品かな」

この理由を語ることから本誌の課題に答えていきたい。

二　六対四の差

なぜ違和感が六割なのか。私の子ども観、教育観、社会観と異なる立場に基づく実践記録だからである。だが、たとえ立場が違っても、感動し新たな知見を見いだす作品はある。これが共感と発見が四割の理由である。

なぜ過去の作品なのか。もちろん過去に書かれたからではない。いつの時代にも現代と未来を読み解く書として蘇る過去の作品は存在する。逆に著された当時はもてはやされても、全く顧みられない作品も多い。本書はいずれでもない。本書が著された過去、すなわち一九五〇年代後半の中学校教師と生徒の世界を理解するための資料として、高く評価すべき作品と考える。

ではなぜ過去の理解ではなく、資料としての価値に限定するのか。そしてなぜ共感と発見より違和感の方が大きいのか。その理由は二つある。

三　過去への資料

一つは、貧しさ故に生じる問題への指導の実践録を、豊かさ故に生じる問題の解決に適用できないということ。家族を養うために中学校を休む生徒が珍しくなく、非行の大半が貧困を理由に生じていた時代の教師の実践を、同世代の七割が高校卒業後も大学や専門学校に進学する時代の問題解決に適用できないはず。だかそれは、豊かな時代の人間が貧しい時代を理解することもまた容易ではないことを意味する。

ちなみに今年度（九五）の新卒教師の多くは七二年生まれ。重化学工業中心の高度経済成長が終焉するオイルショックの年の前年である。すなわち、これから教師になる若者とは、オイルショック後の日本で生まれ育ち、ハイテク産業とバブル景気によって世界に冠たる経済大国になった八〇年代の日本において学校時代を過ごした者である。母親の胎内から大学進学準備が始まっていた者でもある。

このような若い教師に、高度経済成長の成果が浸透する前の日本社会の現実を、自己の経験の範囲で理解することを求めても無駄。だが、この時期の理解なしには現代の教育問題の根を理解できないこともまた事実である。

すなわち、本書の実践の背後にある五十年代後半から六十年代にかけての日本の社会とは、五五年体制や六〇年安保という言葉に象徴されるように、戦後五〇年を枠付ける冷戦構造が完成する時期である。この間に生じたことへの理解が、冷戦終了後の現在と未来のあり方を考える上で必要不可欠な作業であるはず。教育も例外ではない。

二度と子どもたちを戦場にやらないために、戦前の教育実践への絶え間ない反省が必要とされてきた。これと同様に、二度と冷戦を彩ったイデオロギー対立に子どもたちを巻き込まないために、教師は冷戦構造形成過程における学校と教師の教育実践を反省し続ける必要があるはずだからである。

四　違和感の価値

本書を過去の作品とみなす二つ目の理由は、科学と社会主義が正しく善なることを素朴に信じることができた時代の論理を、脱冷戦下の問題解決に適用できないということ。本書の子ども観、教育観、社会観に私が違和感を持った理由でもある。ただし、これはあくまで私の違和感の問題。本書の価値を否定する理由ではない。

「みんなが喫煙する時代に禁煙を主張する人は尊敬に値する。だが、みんなが禁煙を主張するときになって喫煙を非難する人に私は同調できない。私は煙草を吸わないが今喫煙する人を非難するつもりはない。」

これは私が最も尊敬する韓国の友人

の口癖、本書への私の違和感をどのように表現すべきかを悩んでいたときに思い出した言葉である。

冷戦が終わりソ連や東欧の社会主義が崩壊した後に、社会主義や進歩的知識人の自己本位的な前衛論を外在的に批判したとして、どれほどの価値があるのか。むしろ、冷戦下のイデオロギー対立の狭間にあって、多くの教師が一方の党派を支持し他方を攻撃する教育実践を行ったのはなぜなのか。それを実践者に即して内在的に問い続けることこそ重要ではないか。再度（再々度？）過ちを繰り返さないために。

これが先に「教師は冷戦構造が成立した時期の教育と教師のあり方を反省し続ける必要がある」と記した理由であり、本書の資料としての価値を評価する理由である。

では何が価値で何が問題なのか。

五　学校と教師のリアリズム

私は本書の初版が出版された六二年に中学へ入学した。そのため本書を自分の中学時代と重ねつつ読んだ。その結果、上述した研究者としての違和感とは別に、かつて生きた中学生活を再確認し、当時の非行と教師の関係についての新たな知見を獲得できた。

なぜ違和感を感じつつも共感と発見を得ることができたか。一つは、子どもの現実の困難さを正面から見据える足立一中の教師の実践の凄味である。二つは、イデオロギー的粉飾を抑えたリアルな文章で表現する林氏の力量である。そしてこの二つが本書の資料としての価値を支える要因である。

すなわち、本書の価値は、ラベリング理論が知られていない時代の非行少年の指導記録であるにもかかわらず、自己の子ども認識自体が非行を生み出す可能性を自覚した教師の実践が記録されていることにある。いいかえれば、目の前の一人一人の現実と事実のディテールにこだわりつつ、自己の子ども（非行）認識を繰り返し相対化しながら、子どもと格闘する教師の実践が記録された書であるからである。

そして表現のリアルさは問題のリアルさでもある。すなわち、著者のリアリズムは、足立一中の教師にすら潜在する当時の教師と学校の問題をもリアルに表現する。それを象徴するのが現在では差別的と受け取られかねない言葉やレトリックが不用意に使用されていることである。一例を示そう。

「千吉の実父が戦死して、その後現在の土地に移ってきたのだが、父と呼ばされた男が四人あった。第二の父は脳溢血、第三、第四も病死した。それも、前夜までぴんぴんしていたものが、朝になったら死んでいたというような奇妙な死にかただったそうである。小さいころ、千吉が夕方家へ帰ると、母が見知らぬ男と一しょにいるので、逃げだしたことが何度もあった。」

非行の原因を母親との関係で述べた部分だが、著者にとっては事実を表現したにすぎないのであろう。だが、事実認識自体に著者のこの親子への偏見（負のラベリング）が入り込んでいないか。さらに、このようなラベリングの前提に、非行の有無や原因を、学校と教師の見方を基準に判断することを当然視する教育観がないだろうか。

かつて手塚治虫の名作『ジャングル大帝』が黒人差別の立場から告発されたことがある。これと同質の問題が本書にも指摘できる。いうまでもなく問題は著者の表現ではない。このような表現を当然視する時代と社会の子ども観や教育観を解読する資料として用いることができるかどうかである。

六　教師と学校の相対化を求めて

著者は六二年版の前書きで次のように述べている。

「この書の中で活躍する子たちを特例だ、うちの子はこんなじゃないと思わないでください：中略：非行児とか問題児とかいわれる子たちの状況は、いわゆる普通一般の子たちにもあるものなのです。」

著者の子どもへの愛情の深さは疑いえない。だが、先のラベリングが示唆する教育観とは、非行か非行でないかの判断を教師の側に一元化すること。それにこのすべての子どもを非行の予備軍とする位置づけが重なれば、八〇年代の校則の物神化までの距離は遠くない。差別のラベルとともに、教育と管理を同一視する記述を本書に見いだすことも容易である。だが、管理と差別への疑問符もまた本書に見いだせる。

「子どもたちが誤りをする。どう考えてもかれらのほうがまちがっている。こんなとき、『おまえが悪いのだ。』といって済ましていられるのは教師の側であり、おとなの側なのである。そんなことわかっていらあ、どうすればいいんだか教えてくれ。ふん、いいたいことといってやがらと思っても、かれらは、『すいません』というしかないのだ。勝負ははじめから教師の勝ちときまっている。しかし、実は負けである。その証拠に、二、三人の気の強いのが現れて暴れまわると、学校のなかはめちゃめちゃになり、せいぜい、役に立たぬ施設に入れようとして断られる、頭を抱える始末ではないか。／おとなといえば職員室の同僚しか知らず、いつも目下の子どもたちを相手に生きている教師という人種には、弁解の余地もないほどに追いつめられるという経験が少ないから、口では民主主義を唱え、平等を叫んでも、一段高い教壇の上からお説教を授ける先生根性が抜きがたく残っているのだ。」

私が最も共感した部分である。著者のリアリズムに支えられた表現の豊かさと、現代教育が抱える問題の源を最も読み取れる部分でもある。

特集　戦後教育50年「実践記録」を読み直す

●戦後教育50年「実践記録」の再評価
—どこが問題か、何が問われているか—

日本の教育の帰結—世間的価値観にたちむかえる「実践記録」—……庄司　和晃　5
教育行為を読む……齋藤　勉　8
「実践記録」の再評価の視点を提示する……明石　要一　11
「班・核・討議づくり」の「集団主義教育」の問題点……高橋　史朗　14
失敗を公表する勇気と子どものプライバシーの保護を……市川　博　17

●戦後教育50年「実践記録」の提起を検討する

無着成恭『山びこ学校』の検討……佐長　健司　20
長田新編『原爆の子』の検討……安藤　豊　24
小西健二郎『学級革命』の検討……石黒　修　28
東井義雄『村を育てる学力』の検討……菅原　稔　32
斎藤喜博『学校づくりの記』の検討……阿部　昇　36
阿部進『教師の条件』の検討……鈴木喜代春　40
林友三郎『おとなは敵だった』の検討……馬居　政幸　44
大西忠治『核のいる学級』の検討……舘野　健三　48
福地幸造『落第生教室』の検討……中村　拡三　52
坂本光男『生徒会の自治をかれらに』の検討……高田　清　56
斎藤喜博編『島小の女教師』の検討……落合　幸子　60
有田和正『市や町のしごと—ごみの学習』の検討……谷川　彰英　64
本多公栄『ぼくらの太平洋戦争』の検討……藤岡　信勝　68
向山洋一『教師修業十年』の検討……宇佐美　寛　72
落合・築地『自立した子を育てる年間指導』……大森　修　76

●私が選んだ「実践記録」ベスト5—その理由

有田和正『戦争の授業』他を選んだ理由……長谷　博文　80
牛山恵「現代の英雄」他を選んだ理由……小山恵美子　81
有田和正『みみずく学級』他を選んだ理由……勝又　明幸　82
『向山洋一の学級経営・5年』他を選んだ理由……黒崎　洋介　83
斎藤喜博『教室愛』他を選んだ理由……下村　俊雄　84
向山洋一『教師修業十年』他を選んだ理由……追田　一弘　85
向山洋一　ビデオ「じしゃく」他を選んだ理由……有動英一郎　86
有田和正『追究の鬼を育てる』他を選んだ理由……田山　修三　87
向山洋一『斎藤喜博を追って』他を選んだ理由……鈴木　健二　88

教育ニュース・スペシャルアップ
1　いじめ対策緊急会議が「報告書」……安達　拓二　89
2　いじめ問題—教委・学校の対応

★連載／雑誌批評・2……木原健太郎　97
自閉からの開放

★連載／法則化運動のこれからの課題・2
向山実践への挑戦……向山　洋一　101

★連載／授業ディベートの論題開発・2
論題の機能と基本条件……岡山　洋一　西澤　良文　106

★連載／モラルジレンマの教材開発・2
価値葛藤と平野理論(2)……荒木　紀幸　111

（表紙写真提供・㈱モントレ）